

「ええっと、今度のラジオ収録の台本は……と。あ、お便りこれか」

今月収録のラジオ台本が届き、

その内容をチェックしている姉貴。

そして、その横に置物となっている弟の俺。

最近はゲームやラジオの台本問わず、
内容確認の際は部屋に呼び出されている。

「……ん？」

ラジオネーム『処女はつまんないと言われた』さん？
ひっどいラジオネーム……」

「あ、でも女の子からの質問だ」

「んーと……ふんふん、ふんふんふん……
彼氏にコンドームをつけてあげたいのですが、
上手くつけられませんか。経験豊富なほむほむに、
ぜひコツを教えてください……か」

「……まったくもお、
次から次へと難しい質問送ってくるんだから、
うちのリスナーは……」

「その度の実験台にされてる、わたしの弟の気持ちも
考えてもらいたいよね？ ほんと……」

個人的には、もっと際どい質問を送ってくれても、
問題ないわけだけど。

俺という実験体を手に入れてからというもの、
姉貴はラジオの台本チェックをするのも楽しそうだった。

昔はすごく憂鬱そうだったし、
必死にネットで検索して情報を集めてたから、
その頃と比べたら、見守る側も安心できる。

「というわけで、今日はコンドームのつけ方をお勉強します。
……勉強させてもらっても……いい、よねっ」

それには笑顔で頷き返す。

姉貴と性的なお勉強をするのは嫌じゃないし、
退屈だった自分の日常を、豊かにしてもらってる気がする。

今は、毎日が楽しくて仕方ない。

「……そういえば、結局ゴムつけてしたのって、2回目のエッチの時だけだったよね。しかもいざつけてしてみたら、二人とも頭の中ハテナになっちゃって、すぐ外しちゃったし」

「やっぱり、最初に生でしちゃうと……ね。ゴムつけたおちんちんじゃ、お湯で温めたディルドを使ってるのと同じだもん」

わかっていただけで、初体験の一度きりで関係が終わるわけもなく。

二度目はゴムありでしてみたけど、俺のは挿れてすぐ萎え始めるし、姉貴も『え、何これ？』みたいな顔をしてて散々だった。

今は、姉貴が低用量のピルを服用し始めて、中出しし放題になったから、最初に使ったコンドームは処分してしまっていた。

ピルの副作用が心配だったけど、服用する量が少ないから大丈夫と言っていた。

おまけに生理も軽くなったとかで、いいこと尽くめらしい。

とはいえ、毎日決まった時間（姉貴の場合は24時）に忘れず薬を飲まなきゃいけないのは大変そうだけど。

「あ、そうだ。ゴムゴム……適当に通販で頼んでみたんだけど大丈夫だよな？ 一応ネットで調べて、一番薄いのにしてみたんだけど……」

最初に使ったのは安価な上に結構厚めだったから、今回は新しく通販したらしい。

……でも、練習で使うの勿体ないか？

姉貴からすれば、『雰囲気大事！』ということなんだろうけど。

「三枚しか入ってなくて860円って、結構高いくない？ お姉ちゃんたちだったら、一日でなくなっちゃうよね。それが毎日だから……30で掛けて、一ヶ月で26000円ぐらい？ 世の中のカップルってそんなにセックスにお金かけてるの……？」

その上、ホテル代なんかも入れたら、大変なことになりそうな気がする。

恋人ができるとお金がかかるっていうのは、
本当なんだなと実感。

そして、ホテル代はおろかコンドーム代もかかってない俺たちは、
相当恵まれているような気がする。

……もともと、恋人というわけではないから、
比較対象にはならないのかもしれない。

「……ええっと、これどこからでも切れるのかな?」

姉貴はコンドームをひとつだけバラにして、
切り口を探し始める。

女の子がコンドームを取り出す姿って、
妙にエロいものがある。

「んしょ……あ、切れた切れた。で、どっちが表だっけ?
こっ……かぶせる? あれ、こっちな?」

「……ああ、こっちだった。
まずはこの空気を抜い、て……もお、触ってもないのに興奮しすぎ。
先っぽにかぶせるよ?」

「……んで、ここから根元に向かって……
しゅるしゅるしゅる……平気? 痛くない?」

「うん、大丈夫」

大きめのサイズを買ってくれたこともあって、
ほどよい締めつけ感。

ゴムをつけるのにサオを握られてると、
それだけでも気持ちいい。

「女の子がつける場合って、力加減わからないから、
それがすごく不安。かなり力を入れないと、
根元まで伸びていかないし……」

「女の人を考えてるより、乱暴に扱っても大丈夫だよ。意外とね」

その言葉が参考になったのか、姉貴は強めに俺のを握って、
コンドームを根元まで伸ばしていく。

「……よつと。おーできたできた。お姉ちゃんゴムつけるの
上手くない?」

「それに……おちんちんの扱い方も上手になったでしょ?」

なんかもう、ペットの犬や猫を扱うような手つきで、
かわいがり過ぎな気もする。

姉貴曰く、『おちんちん、ほんとかわいい♪』らしいが、
おかげでまともな社会復帰から遠ざかっている。

「ふふっ……あ、これ一度外してもいい？
ちょっと試してみたいことがあるの」

コンドームの先っぽをぎゅーっと引っ張って、
ペチンという音と共に、ゴムが外される。

「もったいないけど、新しいのを開けて……」

「いくよ？ 先っぽにかぶせてから……ん……はむ、ん……
ぢゅ……んぢゅ……ぢゅるる……ずず……んふ、ん、
んんっ……ちゅううっ……ぽっ！」

何をするのかと思ったら、亀頭の先に被せたコンドームを、
器用に手と唇で押し下げていって。

無駄に舌を使ってくるし、
半分はフェラみたいなものだったから、
あつという間に、俺のもそり立ってしまった。

「えへへ、できた！ お口でつけるの成功〜！
どうだろう？ 手でつけるより興奮した？？？」

言わなくてもわかることを訊いてくる。

色々なことに好奇心旺盛なのは、いつものことだ。

日に日に、姉貴がエロくなっていった困る。

「お姉ちゃん的には、ゴムをつけるコツはアレだね。
つけてる間も萎えないように刺激してあげること」

「……特にうちの弟くんは、ゴムつけてると、
やる気なくしちゃったみたいに萎んでいっちゃうから」

姉貴の言う通り、カラダは正直なもので。

ゴムをつけてセックスした時のマイナスイメージが強すぎて、
条件反射的に、萎えていってしまう。

だからさっきも、絶えず俺のを刺激してくれながらの
コンドーム装着だった。

「よし、このお便りの回答は、そんな感じかな。でも、このラジオネーム可哀想じゃない？『処女はつまらないと言われた』さんって……」

「……実際に処女の姉を相手してみてもうだった？やっぱり、つまらなかった……かな？」

「そんなことないよ」

逆に、童貞を相手してみてもうだったかと訊いてみたい。

そもそも、つまらなかったら、二度目三度目とカラダを重ねてないだろうし。

「今、選ぶとしたらどっち？」

「バージンで色々ときこなかったお姉ちゃん……」

「弟といっぱいエッチして、おちんちんの扱いが上手になったお姉ちゃん……」

「う……」

声優の本領発揮とばかりに、左右の耳へ囁かれる。

実際、エッチの時も、

姉貴の声で射精まで追いこまれることが多い。

人気声優の紅衣ほむらとセックスしてるんだと思うと、また別の興奮があった。

「ふふっ……自分でも、こんなエッチな子になるなんて、思わなかったなあ……」

「……このおちんちんのせいで、エッチな女の子にされたんだよ？ 自覚してる？」

真面目な女の子は、たがが外れるとすごい……なんて話を聞いたことがあるけど、それを信じたくなる。

最近の姉貴は、仕事のためだけとは思えないエロエロっぷりだ。

「ん……ゴム外すね。今日のお勉強はおしまいっ」

「……このまま朝まで……いっぱいエッチしたいところだけど……」

「たまにはくっついてイチャイチャするのもいいよね。添い寝添い寝っ。ぎゅーってして、ぎゅーってっ」

急に抱きつかれて、そのままふたりでベッドへ横になる。

不思議なもので、何度も肌を重ねていると、寝た時のお互いのポジションみたいなのができて、添い寝の体勢も、自然とかっしり収まるようになっていた。

イケメンムーブじゃないけど、無意識のうちに、髪を撫でてしまう。

童貞を卒業してから、なんとなく異性に対して、余裕が出てきたような気がする。

「……エッチしたあととかもね、こうやってくっついて、頭を撫でもらうの好きなの……安心して、すぐ眠くなっちゃうけど……」

実は俺も同じで、姉貴の体温と心地良い声が、いつも安眠に誘ってくれる。

エッチのあと、気がついたら二人で朝まで爆睡……なんてことが、今までにも何度かあった。

「……………」

「……あのね、怒らないで聴いてほしいんだけど……ずっと、謝ろうと思ってたんだ……」

一瞬、悪い話かと心配になる。

もうこの関係は終わりにするとか、好きな人ができたとか……

最近の俺は、そんなことばかりに怯えてる。

そうしたこちらの不安をよそに、姉貴は、恥ずかしそうに顔をうずめながら、話を続けた。

「毎日毎日、恋人でもないのに……エッチなことに付き合わせちゃって……」

「最初の頃は、台本でわからないこととか、書いてあることを実際にやってみたくて色々お願いしてたけど……最近はね、仕事であつたストレスを忘れるためにおちんちん触ったりとか……しちゃって……」

「この仕事、大好きなんだけど……収録も大変なんだよね。台本が誤字だらけだったり、収録が始まってるのに、全部の台本が届かないこともあったり……」

「収録が始まったら始まったで、最初に演技して、メーカーの人がリテイクを出してくるんだけど……録り直してみたら、やっぱり最初の方がよかったとか、今の演技で始めから録り直してもいいですかとか……」

姉貴がこんな風に、真面目に仕事の愚痴を言うのは珍しい。

でも、不満を溜めこみやすいタイプだと思うから、こういう時に話してくれた方が、こちらでも安心する。

「……もちろん、仕事だから笑顔で『大丈夫です！』って答えるよ？ でも、そういう細かいストレスが、どんどん溜まっていつちゃって……」

「気がついたら、愛想笑いばかり上手くなってる。自分でも、いつ本気で笑ってるのかわからなくなるぐらい……」

姉貴らしいな、とも思う。

おそらくこちらに意見を求めているわけじゃないし、ただ話を聴いてもらいたいだけなんだろう。

それはいいんだけど……

鼻先にかかる髪の毛の匂いが、眠剤ばりに眠気を誘ってきていて。

甘えた声を出されると、なおさら意識が遠ざかりそうになった。

「……でも、こうやってお家でくついたり、甘えたりすると、心がすごい楽になるの」

「お姉ちゃん、姉弟で話してる時だけ、素の自分でいられてる気がするんだ……」

嬉しいことを言ってくれている。

言葉をかけたいのに、もう……眠気の限界が……

「だから……もしカノジョができちゃったら、こういう生活は終わりにするけど……」

「それまでは、お姉ちゃんの……彼氏っぽい弟？……みたいな感じで、いてくれる？
な、なんか告白してるみたいだけど」

「……あれ、寝ちゃっ……てる？」

……静かに聴いてくれてるなあと思ったら……もう……

「でも、お姉ちゃんと同じように……安心してくれてるってことなのかな」

「そうだと……いいな……」

……この日は、姉貴に告白をして付き合い始める夢を見た。
できることなら、そのままずっと眠り続けていたかった。

誰もいない部屋で、パソコンの電源を入れる。

今日は『紅衣ほむらのとつても性的なラジオ』が
配信される日。

なんやかんやで、毎月楽しみにしている自分がいる。

さすがに姉貴がいる前では聴けないけど、
今日は仕事で夜まで帰ってこないらしい。

「はい、じゃあ次のお便り。
ラジオネーム『お姉ちゃん大好き』さんから」

「『ほむらさん、ほむらじわー』ほむらじわー。
『僕にはひとつ上の姉がいるのですが、いつも仕事で
がんばっていて、それを応援しているうちに、
ひとりの女性として好きになってしまいました。
でも、それを打ち明けて今の姉弟の関係を壊して
しまうのが怖いんです。どうしたらいいでしょうか？
アドバイスよろしくお願いします』」

「……あー、わたしにも弟がいるんですよ。ひとつ下の。
それがもうかわいくてかわいくてすね、
完全にブラコンなんですけど、うーんそっかあ……
ひとりの女性として好きに……ううん……
ほむ拉的には、打ち明けてしまっいいと
思うんですけどねー」

「だって、好きになっちゃったら……
誰にも止められなくないです？
周りがどうこう言ったって、自分が納得しなきゃ……ね？
たとえ姉弟でも、あきらめるのとか無理でしょ」

「なので、ほむらお姉ちゃんとしては、勇気を出して、
告白してみるのがいいと思います。
その結果がどうあれ、姉弟の関係が壊れることなんて
ないんじゃないかな。好きになっちゃったらしょうがない！
個人的にも、とても応援してます。がんばって！」

「それでは次のお便りにいってみましょー」

……姉貴は、前に俺がラジオへお便りを送ってることに
気付いていた。

今になって自分が情けなくて仕方なかった。

こんな方法で、気付いてもらおうとするなんて。

おそらくだけど、姉貴はこういうところ鈍感だから、
今回のお便りに関しては、普通のリスナーからだと思っている。

自分の弟が本当にガチ恋しただなんて、考えない人だ。

「好きになったら……」

誰にも止められない。

姉貴はそう言ってた。

そんなの、最初からわかってたはずなのに。

ラジオで、姉貴の反応を見ようだなんて。

「ただいまー」

仕事から帰ってきた姉貴の声が聴こえてくる。

言わなきゃ、と。

迷いなく、自分の部屋を出た。

結果がどうなろうと関係ない。

自分が納得できなきゃ、俺は前にも後ろにも進めない。

「ごめんね、収録で遅くなっちゃって。晩ご飯すぐ作るね」

「あ……あのさ、大事な話があるんだけど……」

「……え、大事な話？ なになに、帰ってきて早々。」

「んじゃあ、一緒に向こうで晩ご飯の準備しながら話そ？」

「もうお腹ぺっぺこでさー……」

手早く着替えを済ませて、キッチンへと向かう姉貴。

その後ろ姿に向けて、俺は声をかける。

「ラジオネーム、お姉ちゃん大好きさんからのお便りです」

「え……？」

振り返った姉貴は、少し驚いた様子でこちらを見る。

「ああ、今月のラジオ聴いてくれたんだ？」

「……………」

どんな顔をして頷いたらいいか、わからなかった。

だから一生懸命、声を振り絞って。

「俺、姉貴のことが——」

どうか、あの日見た夢の続きが見られますように。

そう胸に願い、実の姉に真っ直ぐな気持ちを、

この先も変わらないであろう想いを、

大好きなその人の目を見つめながら、

決して視線を逸らさずに。

伝えた——

※END